

発掘調査実績報告

# 徳島市常三島遺跡

## 2003 年度埋蔵文化財調査概要報告書

徳島大学(工)総合研究棟改修に伴う埋蔵文化財発掘調査

2003 年 10 月 30 日

徳島大学施設委員会  
徳島大学埋蔵文化財調査室

1. 遺跡名称 徳島市常三島遺跡
2. 遺跡所在地 徳島市南常三島町 2 丁目 1 番地
3. 調査契機 徳島大学（工）総合研究棟改修に伴う埋蔵文化財発掘調査
4. 調査面積 381 m<sup>2</sup>
5. 調査期間 2003 年 5 月 1 日～2003 年 7 月 17 日
6. 調査体制
- 調査主体 徳島大学施設委員会  
委員長 青野敏博 徳島大学学長  
徳島大学埋蔵文化財調査室  
室長 定森秀夫 総合科学部助教授
- 調査員 定森秀夫  
中村豊 大学開放実践センター助手
- 調査補助員 堺圭子・井本尚子・安山かおり（施設部技術補佐員）

## 7. 調査経過

工学部建築工学科棟改修に合わせて、新たに実験棟を旧実験水槽跡に建てるということで、当初は該当地を全面発掘する予定であった。ところが、急遽、実験棟基礎の設計変更が行なわれ、調査予定地中央に包含層の破壊されない部分が生じてきた。そこで、基礎で破壊されるロ字形部分のみの調査に変更した。それでも、従来の常三島での調査例から考えると、発掘調査予定期間内での調査終了は無理ではないかと思われたので、調査予定地の北側区・東側区の広い部分を先に調査し、遺構密度などを見極めて、期間的に余裕があれば、南側区・西側区の狭い部分を調査するということにした。もし調査が無理であった場合は、工事開始後の立会い調査でできるだけ記録を残すということにした。

5 月 1 日に機械掘削を開始し、明治時代水田層上面まで掘削し、6 日に終了した。この水田層上面では鋤痕が検出できなかったため、すぐさま第 1 遺構面まで掘り下げて、東側区の北東で建物を検出し、一方北側区で想定どおりの位置に屋敷境溝を確認した。一定程度調査が進んだ段階で、北壁際で断ち割りを入れて、屋敷境溝の状況を見た。その結果、屋敷境溝の位置はほとんど移動しておらず、3 時期ほどに分層可能であること、また下層の溝の遺物包含は少ないであろうことが予測された。

この屋敷境溝の状況確認によって、期間内に南側区・西側区を調査することが可能と判断し、5 月 29 日にその部分の機械掘削を行なった。南側区の西で明治時代以降の大きな池

を検出したが、南側区では南北の屋敷境溝 1 条、西側区では東西の屋敷境溝 2 条を確認できた。

各地区で、遺構検出・記録を行ないながら、調査が終わり次第、各遺構面を順次 10cm ずつ下げて、各種の遺構を検出していった。

最終面は砂ではなく埋め立て土で、南側から緩やかに北に向かって低くなっていく地形を確認することができた。1999 年度発掘調査の共通講義棟で検出されていた、砂の上のいるブラックバンドと呼んでいる黒褐色粘質土も一部確認できた。

調査の後半は雨が多く、期間内に調査を完了するために、土・日曜日で作業可能な日には作業を行い、雨でも仮設テントを建てて作業を行って、7 月 17 日にすべての調査を終えることができた。

## 8. 調査概要

遺構は、溝、柱穴、土坑、井戸など計 99 基にのぼる。明治時代以降の遺構としては、水田、暗渠、池などを検出し、第二次世界大戦の徳島空襲時の焼夷弾、それによる焼瓦などを廃棄した瓦溜なども確認した。

江戸時代の遺構は、3 面が確認され、それぞれに調査を行なった。屋敷境溝、建物跡、土坑、溝などを検出し、最終面は砂ではなく、埋め立て土であることを確認した。

以下、主要な遺構を記述していくことにする。

### 1) 明治時代以降の遺構

#### (1) 水田 S01 (図 2 上、写真図版 1 上左・下、写真図版 2 上)

調査区全面で検出したが、一部攪乱と混同して重機で掘削してしまったところもある。また、南側区・西側区に関しては、重機掘削でこれを排土した。青灰色を呈する水田層は 10cm 前後残存していた。この上面で耕作痕を探したが、検出できなかった。水田層を排土して、東側区で断続的な鋤痕の一部(写真図版 1 下)と西側区で溝状の鋤痕(写真図版 2 上)を検出した。

#### (2) 暗渠 S02 (図 2 上)、暗渠 S83 (図 2 上、写真図版 1 上右)

東側区で検出した南北に続く竹樋を用いた暗渠 S02 は、昨年度調査の電気棟で検出した暗渠のように一部で石を載せて固定化を図っていた。また、竹を排除後、調査区のほぼ中央で竹を垂直に挿して自噴させて竹樋へ導いたと思われる部分を確認した。ただし、竹樋が腐っていたため、穴をあけて自噴の竹と連結していただろうとの推測しかできない。西側で検出した S83 は、当初は検出できず、かなり下げた時点で確認できた。位置的に池 S59 と関連する施設と思われる。

#### (3) 池 S59 (図 2 上、写真図版 2 中・下)

南側区で検出した東西幅 6m ほどの池で、埋土は黒褐色粘質土である。底部あるいは底部近くには大きな石が見られる。東寄りの位置に桶を設置して、中に竹を砂層に挿し込んだ自噴施設が存在する。この埋土中から「高二 中西薫 筆洗」の墨書が裏面に見られる磁

器を検出した。当地は、明治時代以降水田となり、その後大正 11 年に徳島高等工業学校、昭和 19 年に徳島工業専門学校、昭和 24 年に徳島大学工学部となっている。「高二」は高等工業学校二年を示すと考え、同窓会名簿・学籍簿などを調べたが、中西薫という名前を見つけることはできなかった。当地が水田から学校に変わった時も、この池は残されていたか、埋められずに放置されていたのではなかろうか。

## 2) 江戸時代の遺構

### (1) 屋敷境溝 S25・屋敷境溝 S26 (図 1、図 2 下・3・4、写真図版 3・4・5)

安政年間の『御山下島分図』(個人蔵)を参照すると、調査地には、東に近藤家、西北に長谷川家、西南に柏木家の 3 つの屋敷地がかかっている。これらの屋敷地の屋敷境溝のうち、長谷川家の屋敷境溝 S25 と近藤家の屋敷境溝 S26 の南北方向の 2 条を検出した。

調査当初は、これらは 2 条の溝ではなく二つ合わせた浅く広い溝状の遺構となっていて、ある程度下げた段階で、2 条の屋敷境溝の輪郭がでてきた。北側区では、長谷川家の屋敷境溝 S25 と近藤家の屋敷境溝 S26 を確認し、南側区では近藤家の屋敷溝 S26 の南への続きは確認したが、南側区で S26 と平行するはずの柏木家の屋敷境溝は池 S59 によって破壊されていたことが判明した。なお、近藤家とその南の佐藤家とを区画する屋敷境溝は検出することができなかったため、これらの屋敷境溝は調査区外となる。

この 2 条の溝は、それぞれほとんど位置に変化はなく、上層、下層、最下層の 3 つに堆積土層を分けることができたので、3 時期にわたっていることが判明した。

屋敷境溝 S25 上層は、北壁断面で見ると、幅 1.7m 前後、深さ 0.3m ほどである。瓦、陶磁器などが大量に出土した。S25 下層は、幅 2.0m 前後、深さ 0.25m ほどで、上層に比べると遺物の出土は極端に少ない。また、東側に木杭と竹杭を使用した杭列を検出したが、土留め用の横板などは検出できなかった。S25 最下層は、幅 1.6m 前後、深さ 0.4m ほどで、下層同様に遺物の出土は少ない。なお S25 より西側に溝 S95 を検出していて、これが極初期の屋敷境溝の可能性はある。

屋敷境溝 S26 上層は、北壁断面で見ると、幅 2.7m 前後、深さ 0.3m ほどであるが、S25 のように遺物は大量には出土しなかった。また、当初は分からなかったが、明治時代以降のいくつかの土坑がこの溝を切っていることが後で判明した。S26 下層は、幅 2.2m 前後、深さ 0.3m ほどで、遺物の出土も少なく、S25 に見られたような杭列は検出されなかった。S26 最下層は、幅 1.5m 前後、深さ 0.4m ほどであり、下層同様、遺物の出土は少なかった。この S26 の南側区への続きも、ほぼ上述した北側区と同じような規模と堆積状況であったが、上層での遺物の出土は北側区に比べると多かった。

出土遺物の検討を行っていないので、現時点で時期を特定することはできないが、最下層が 17 世紀後半～18 世紀、下層が 18 世紀代、上層が 19 世紀～幕末と推測される。

### (2) 屋敷境溝 S67・屋敷境溝 S68 (図 1、図 2 下、図 3、図 5、写真図版 6、写真図版 7 上・中)

長谷川家の南側屋敷境溝 S67 と柏木家の北側屋敷境溝 S68 の 2 条を西側区で検出した。

S67は当然、屋敷境溝S25と一体のものであるが、S25とS67とがどのように繋がるのかは調査区外のため明らかではない。しかし、その部分は破壊を免れて残存しているはずなので、将来発掘調査を行えば、それらの繋がりとは判明するものと思われる。

これらは、当初、S25とS26のように、明確に分かれていず、2つ合わせた浅い溝状の遺構となっていたが、ある程度下げた時点で、2条の屋敷境溝として認識できた。これらの溝はほとんど位置を変えることなく、上層、下層、最下層の3層に分層することができた。

屋敷境溝S67上層は、西壁断面で見ると現状で、幅1.4m前後、深さ0.2mほどで、出土遺物はS25と比べると、極端に少ない。S67下層は、幅1.2m前後、深さ0.3mほどで、出土遺物は少ない。S67最下層は、幅1.2m前後、深さ0.4mほどで、下層と同じく出土遺物は非常に少ない。

屋敷境溝S68上層は、西壁断面を見ると現状で、幅2.2m前後、深さ0.2mほどで、出土遺物はS67よりは多い。S67下層は、幅1m前後、深さ0.3mほどで、出土遺物は少ない。S67最下層は、幅0.6m前後、深さ0.3mほどであり、遺物の出土は少ない。

屋敷境溝S68に繋がる柏木家の東側の屋敷境溝は池S59によって切られていて、その実態は不明であるが、溝の形態はおおよその推定はつく。

### (3) 建物 (図2下、図6上、写真図版7下、写真図版8、写真図版9上・中)

明治時代水田層を掘り下げて、第1遺構面で、石・瓦が密に詰まっている直径50cmの柱穴S19、柱穴S21を検出した。両遺構の中心間の距離が2mであったため、方向と距離を目星に精査したところ、建物の柱穴になるものを計5基検出した。柱穴S17と柱穴S35は、S19・S21のように石・瓦が密に詰まった状況は確認できなかった。

さらに、同一面でこの建物の西側に、建物と平行して、南北に1m間隔で並ぶ小さな柱穴S32・S33・S34を検出した。これらにも石が詰まっていたが、調査を進めると、その下にもう一段石の詰まった穴が存在する2段構造になっていた。これは、おそらく作り直しではないかと考えられた。この3つの柱穴は他に対応するものがなく、建物に平行することを考えた場合、庇の柱穴と考えるのが一番合理的ではないかと思われる。

以上の建物と庇には平行しないが、S32の南側に直径30cmほどの柱穴が近接して2基あり、建物と庇と何らかの関連があるものと思われる。

水田層の直下で検出されたので、幕末頃の近藤家の建物と思われる。図1の絵図の屋敷地の状態を見ると、現在の建物配置から若干東に振れていて、この建物も現在の建物配置から若干東に振れている。また、おそらく礎石があったものと思われるが、削平されてしまったのだろう。

### (4) 井戸S75 (図3上、図6下左、写真図版9下、写真図版10上)

掘り方などが明確ではなく、当初単なる土坑として調査を進めていたが、円形の桶の上端が出て、初めて井戸であることが判明した。井戸の東半分は調査区外であり、すでにこの上端から湧水をはじめていたので、桶内部を若干下げて作業を終わる予定であった。桶のサンプルを採取するため、ポンプを入れて、内部を掘り下げたところ、内部にもう一つ

の桶が設置されていることが分かり、2段構造であることを確認した。湧水が甚だしく、図面と写真で2段構造が分かる深さで作業を中断した。

上段桶内径は68cm、下段桶内径は64cmであった。桶板材は厚さ2cm、幅10cmであった。桶内部からの出土遺物が少なく、時期は掘り方出土遺物などを検討して決定したいが、第2遺構面での検出なので、18世紀代と推測される。

#### (5) 土坑 S89 (図3下、図6下右、写真図版10中)

第3遺構面で検出した、東西365cm、南北50～60cm、深さ45cmの細長方形を呈する土坑である。当初は、掘り方が明確ではなく、土坑 S86 を調査していて、断面観察により別途の遺構 S89 がこの S86 を切っていることを確認、再度面的に精査をした結果、細長い土坑を確認することができた。東側に土師皿、瓦質土器、陶磁器などが集中していて、炭を多く含む部分も見られた。

第3遺構面での検出であること、土師皿が出土していることなどから見て、17世紀代と思われる。また、後述の造成盛土された直後、すなわち宅地化された後の遺構と思われるので、17世紀後半代にさらに時期を絞れるだろう。

#### (6) 造成盛土 (図3下、写真図版10下)

東側区で第3遺構面を精査中、土色・土質が斑状になった部分を確認した。東側区中央の土層観察用畦の土層を見ると、ベースである砂が北に向かって少しずつ低くなっていく状況が推測された。面的に斑状に見える土質の土が、地形の傾斜に沿って堆積している状況が見られた。これはまとめのところでも述べるが、徳島藩初期の船置所である安宅島の北側の水路にあたる自然流路を埋め立てた土であろうと思われる。

### 9. 調査のまとめ

今回の調査の大きな成果を挙げると、以下の三つとなろう。

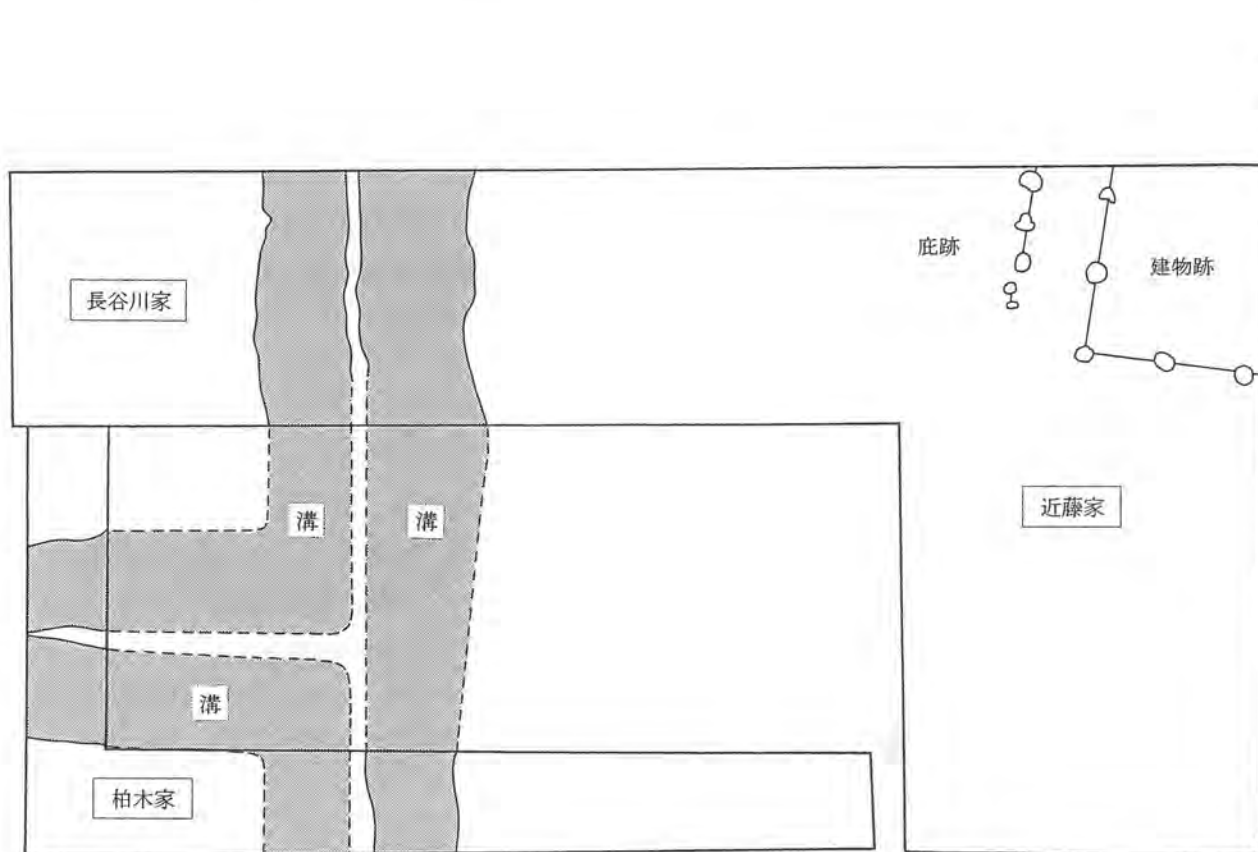
第1は、安政年間の『御山下島分図』(個人蔵)に示された位置とほぼ同じ位置に屋敷境溝を確認したことである。それは、常三島遺跡で通例の2条一組をなし、江戸時代全期間を通じてほとんど溝の位置は動いていないことが確認された。今回、屋敷境溝のコーナーの状況を確認できるはずであったが、その部分は破壊されずに残るため調査をしておらず、状況を知ることはできなかった。溝は、最低3時期に分かれるが、古いものほど狭く深いが新しくなると広く浅くなっていくという、常三島での屋敷境溝のセオリーを見ることができた。

第2は、近藤家の屋敷地内で建物を確認したことである。時期的には、幕末まで存続していた屋敷で、どこまで遡れるのか判断するのは難しいが、ほぼ19世紀代であろうか。どのような性格の建物になるのかは、今後検討してみたいが、屋敷地全体の位置から見て、母屋の可能性は低いように思える。また、建物がやや東に振れているが、絵図に見られる屋敷境溝とほぼ平行するものの、東側の道路とは平行しない可能性が高い。

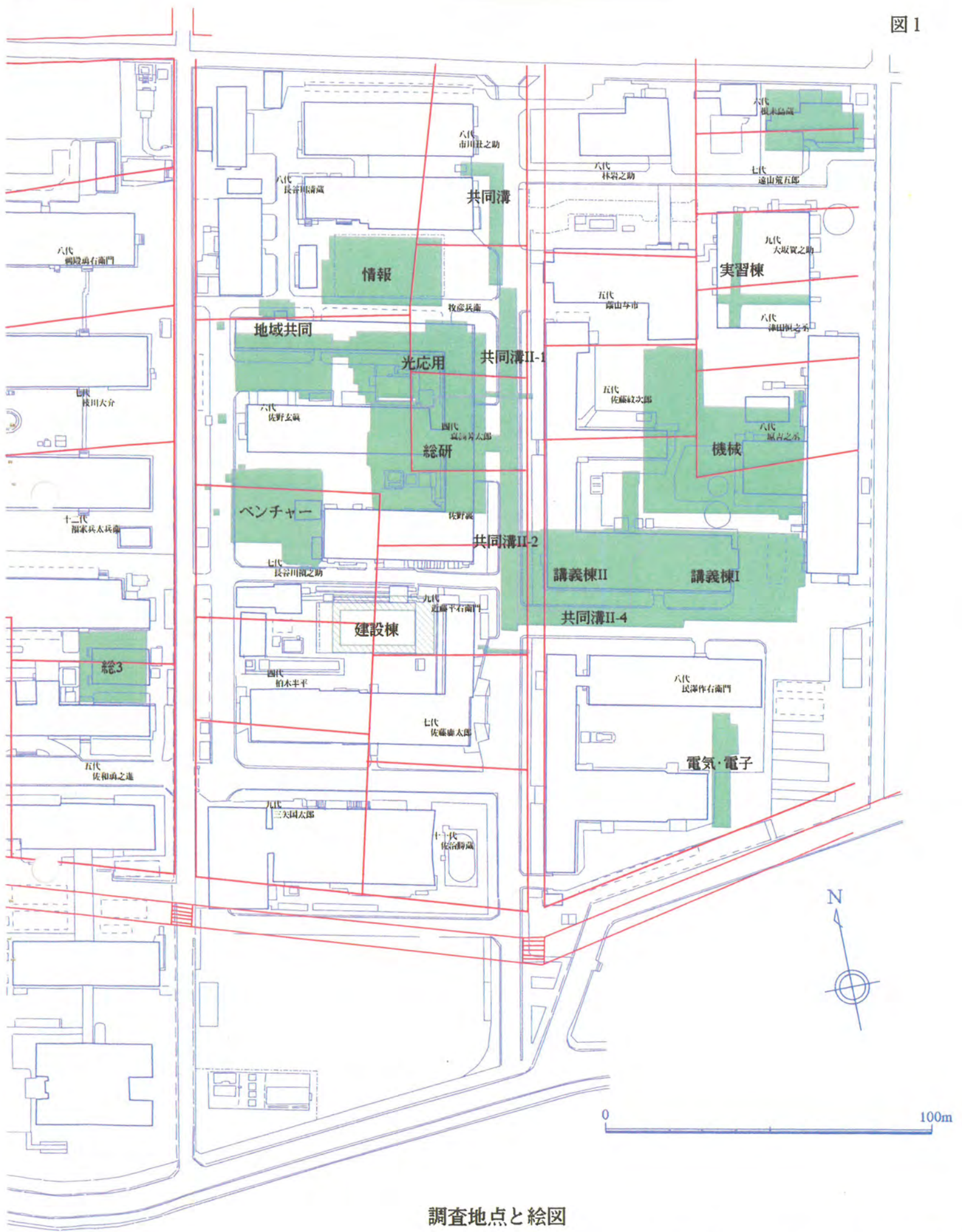
第3は、造成盛土の確認である。この造成盛土は、1999年度に実施した本調査地点の東

側である工学部共通講義棟地点発掘調査でも確認されている。前年度、発掘調査を行なった工学部電気電子棟地点、総合科学部 3 号館地点で想定された、徳島藩初期の船置所関連の遺構とも関係してくるものと思われる。すなわち、総合科学部 3 号館地点の概要報告書では、安宅島の北側の水路を幅 5m 前後と想定していたが、どうも人工掘削による水路ではなく、自然流路的な緩やかな湾入した幅の広いものであった可能性が高い。これらに関しては、これまでの調査の成果を踏まえて、今後の検討課題としておきたい。

最後に、調査区内の幕末頃の屋敷配置の復元図を下に付加しておく。いずれにしても、三つの屋敷地とも、母屋から離れた屋敷地内の裏手になるので、屋敷地の主要部分にどのような建物や附属施設があったのかは、今後その部分の調査次第ということになるだろう。



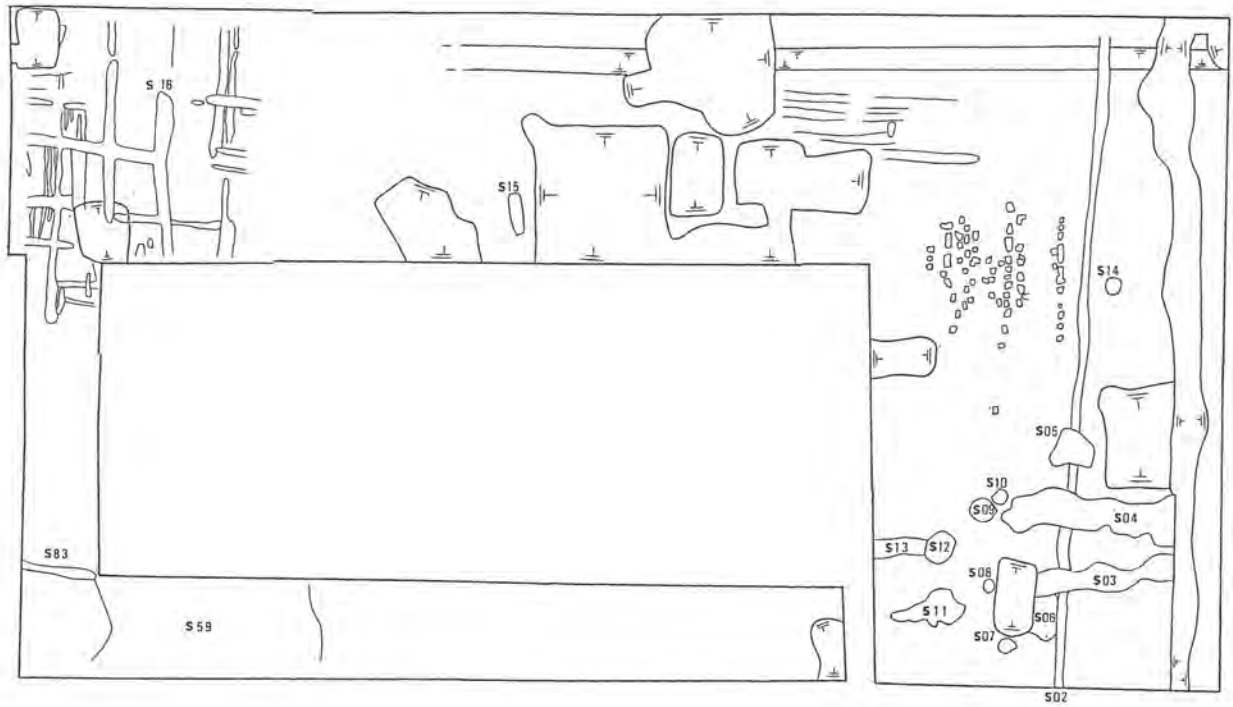
調査区内 屋敷地配置状況復元図（幕末）



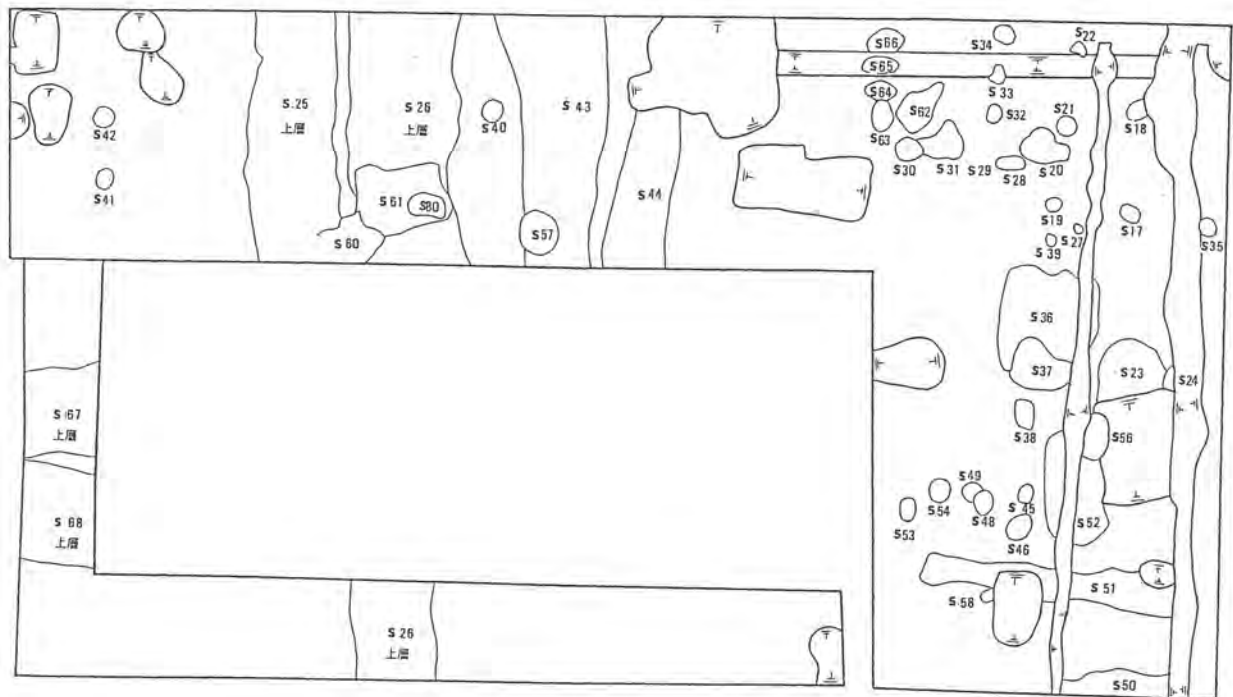
調査地点と絵図

「御山下島分絵図 常三島」安政年間（個人蔵）参考

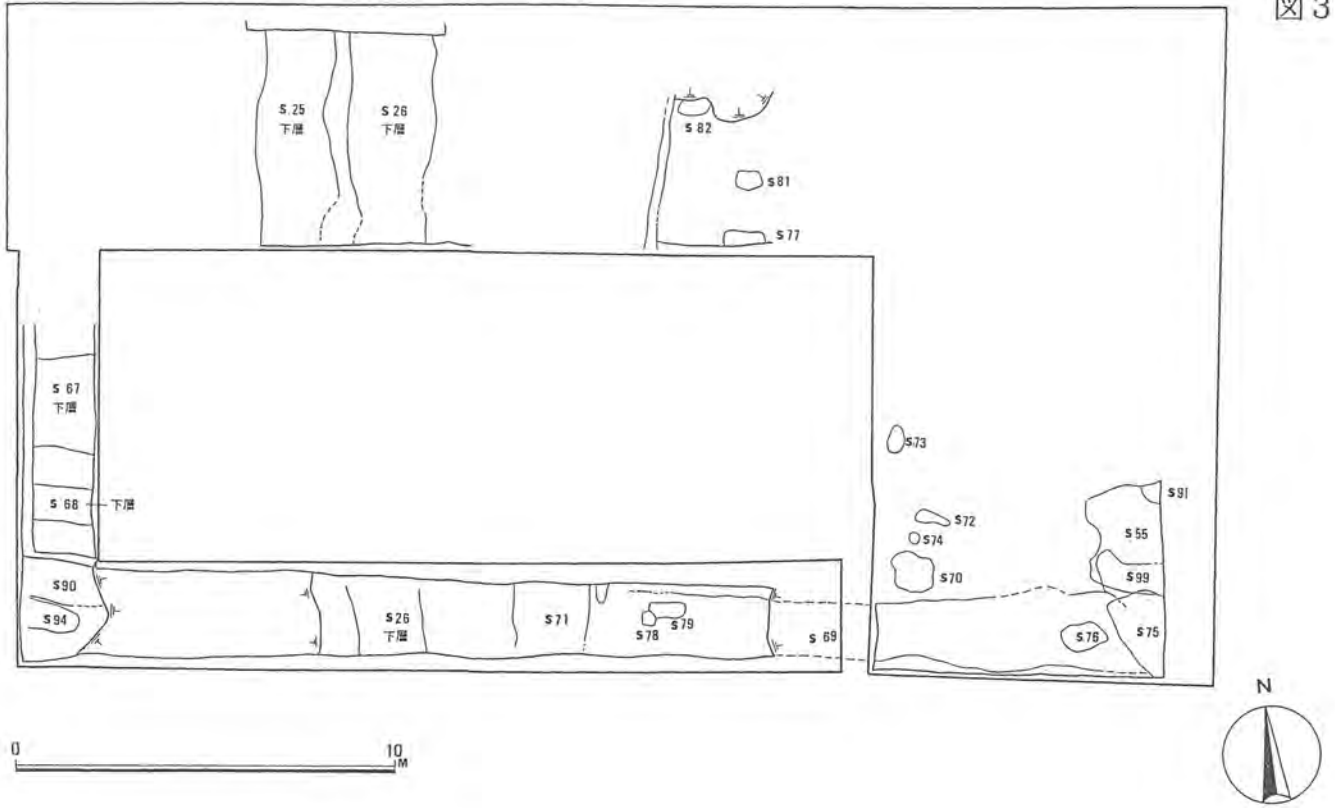




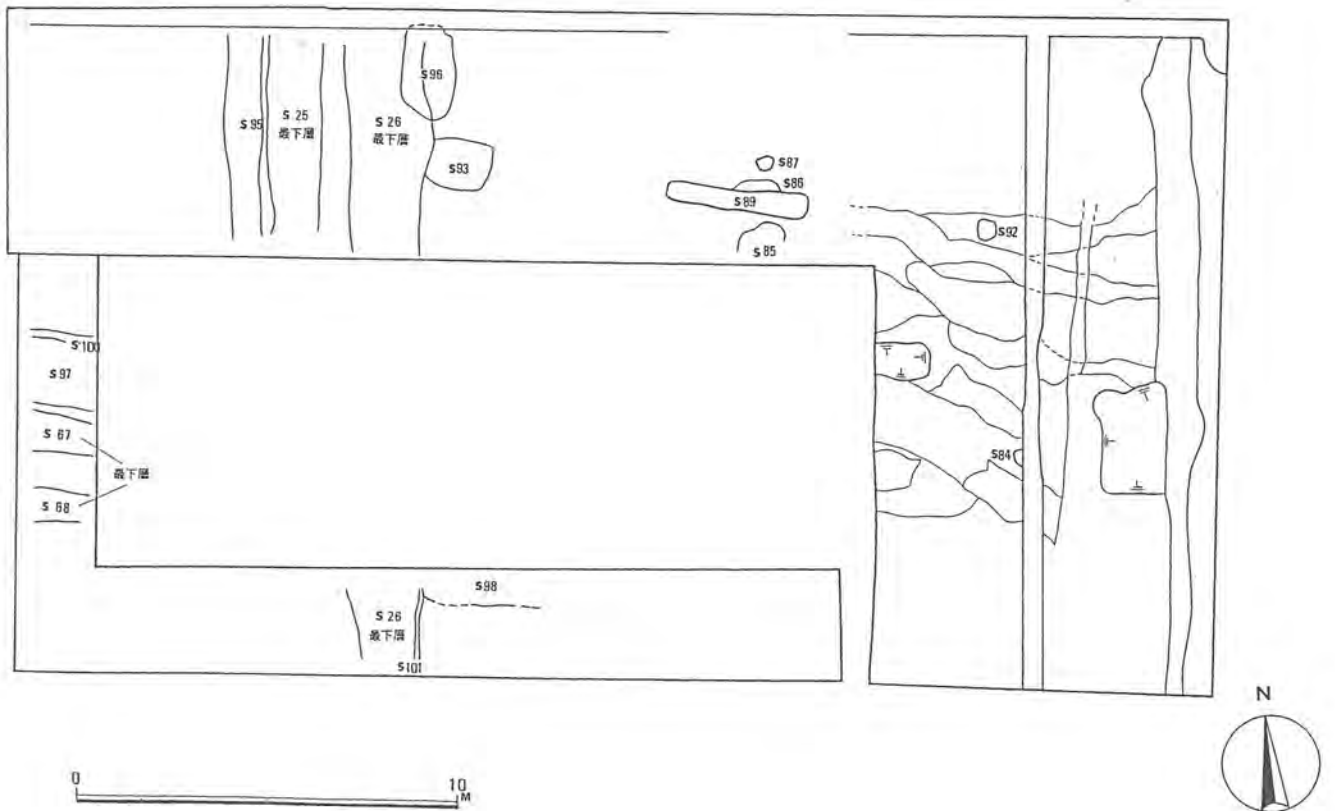
明治水田・床土面 T.P. 0.20~0.08m (S = 1/200)



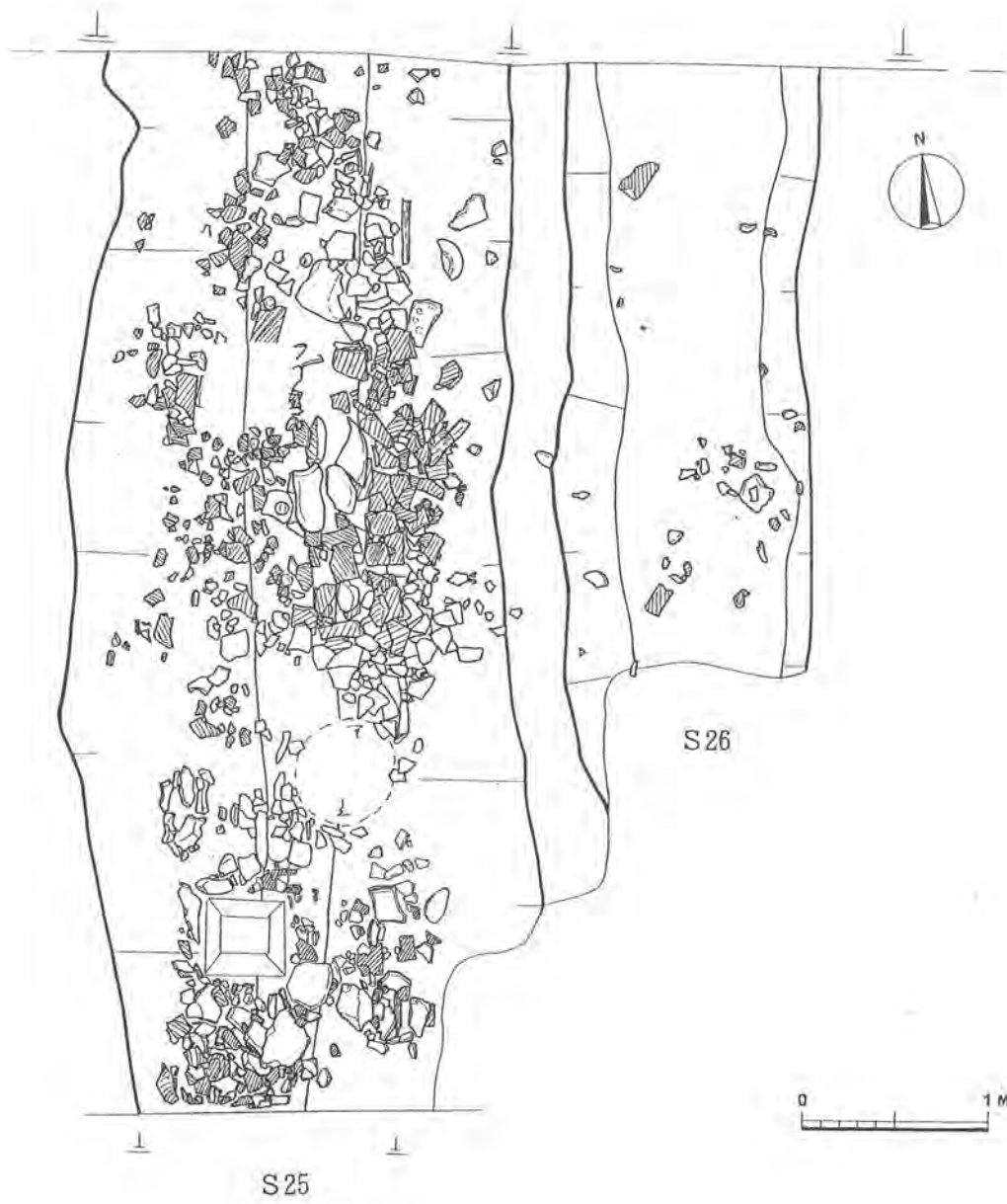
第一遺構面 T.P. 0.08~-0.05m (S = 1/200)



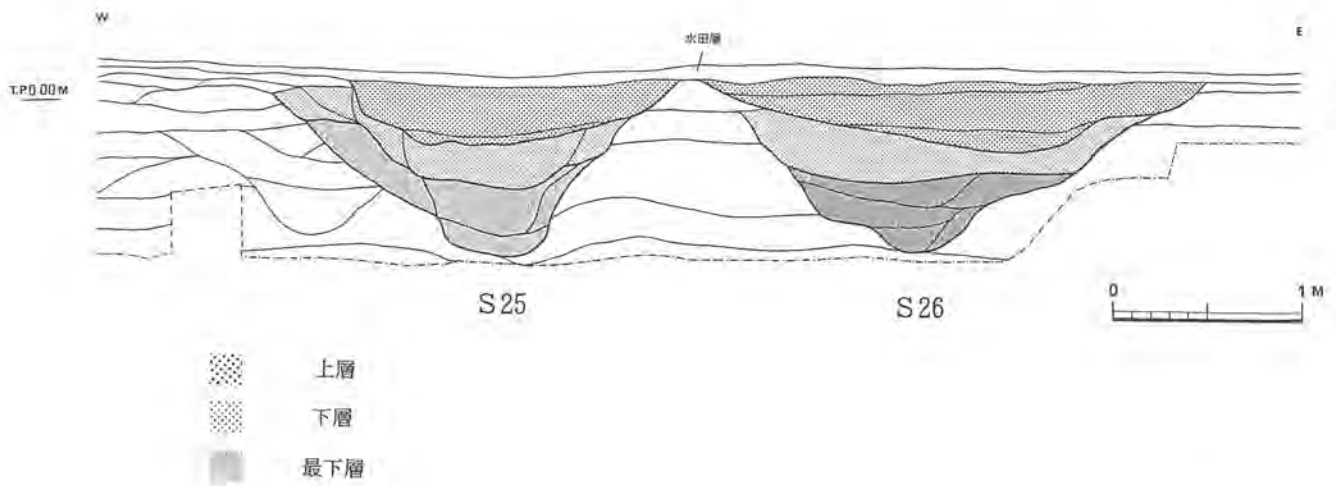
第二遺構面 T.P. -0.10m (S = 1/200)



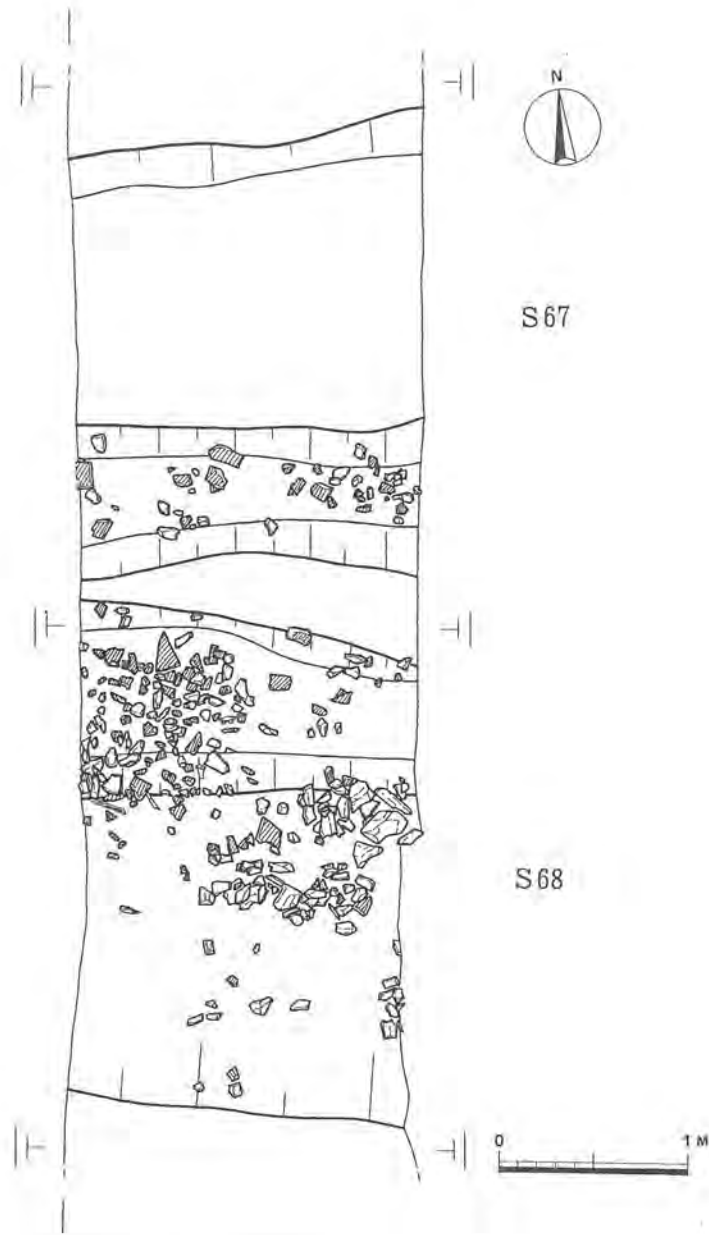
第三遺構面 T.P. -0.20m · 武家屋敷地造成土状況 (S = 1/200)



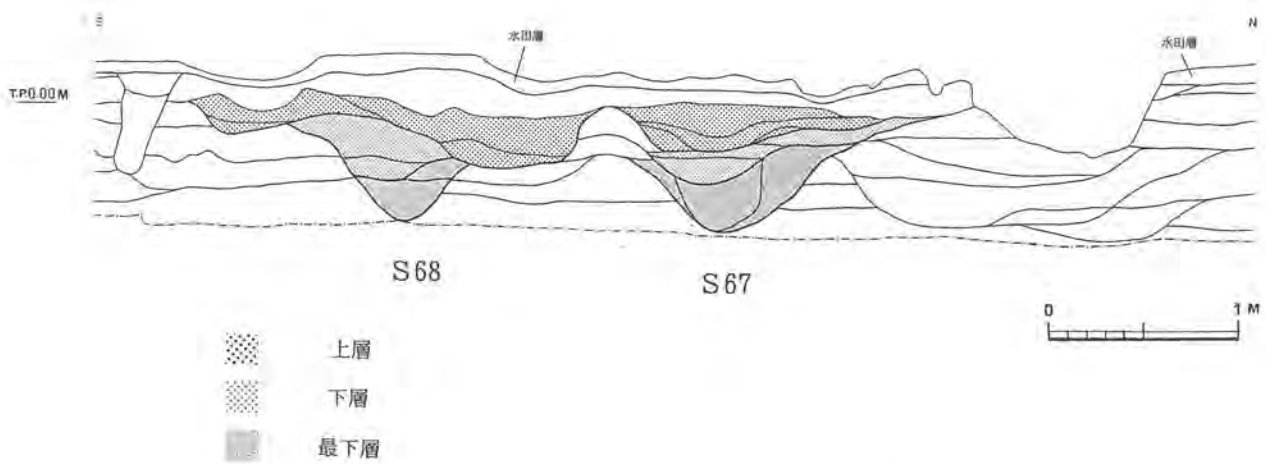
S25・26（屋敷境溝）上層 2 回目遺物出土状況図（S = 1/40）



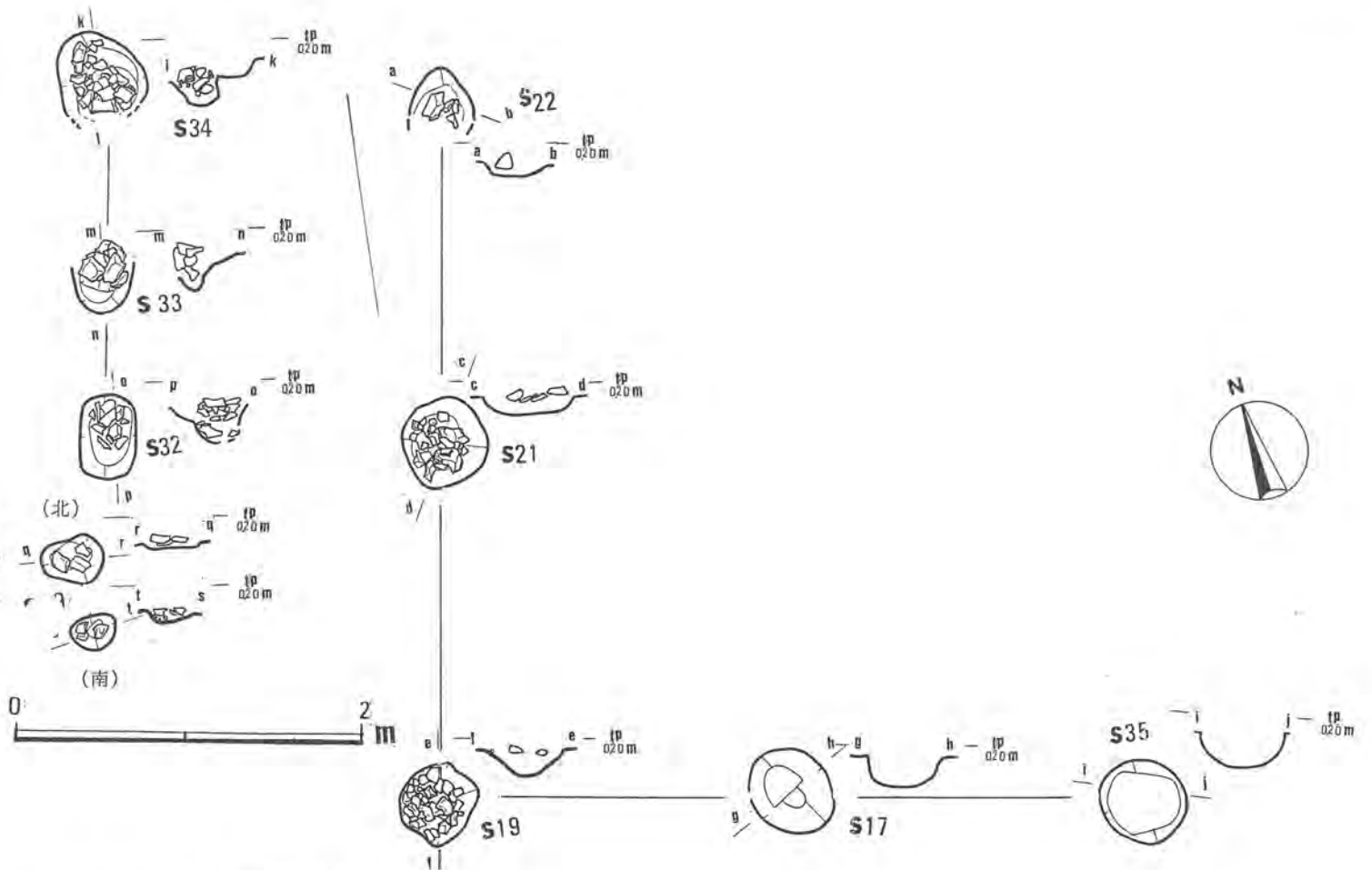
S25・26（屋敷境溝）土層断面図（S = 1/40）



S67・68（屋敷境溝）上層遺物出土状況図（S = 1 / 40）

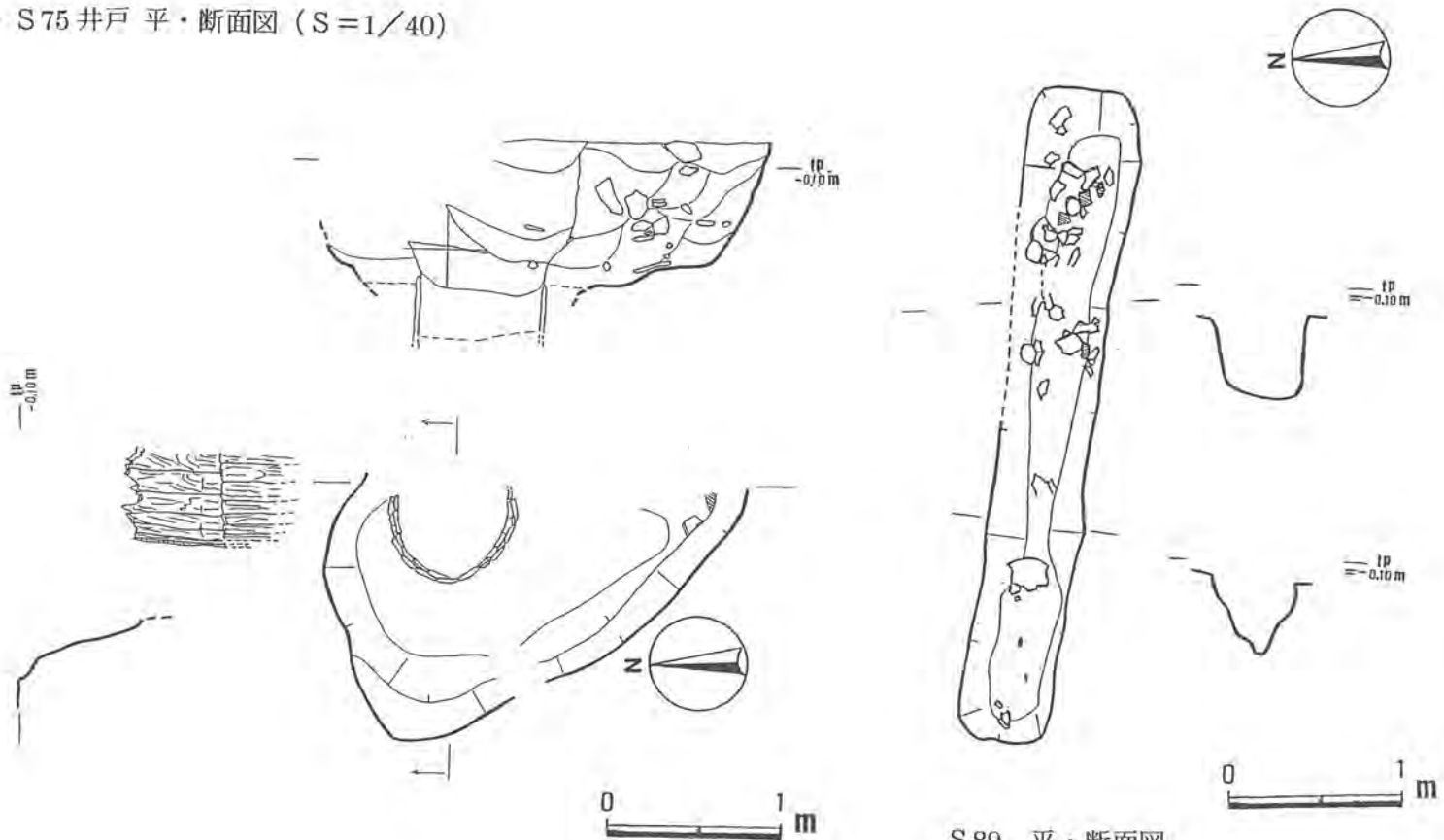


S67・68（屋敷境溝）土層断面図（S = 1 / 40）



建物跡 平・断面図 (S=1/40)

S75 井戸 平・断面図 (S=1/40)



S89 平・断面图  
(S=1/40)



S01 (水田) 検出 東より



S83 (暗渠) 竹樋検出 西より



R・S-16・17グリッド 床土上面鋤痕 東より



Q・R-11・12グリッド  
床土上面 鋤痕 南より



S59 (池)  
遺物出土状況 北より



S59 (池) 遺物出土状況  
「高二 中西薫 筆洗」



S25 (左)・S26 (右) 上層  
1回目遺物出土状況 南より



S25 (左)・S26 (右) 上層  
2回目遺物出土状況  
S60・61  
検出及び遺物出土状況  
南より



S25 (左)・S26 (右)  
上層完掘状況  
S60・61 掘り下げ状況  
S80 検出状況  
南より





S25 (左)・S26 (右) 下層  
遺物出土状況 南より



S25 (左)・S26 (右) 下層  
完掘状況 南より



S25 下層杭列出土状況  
中央部 西より



S25 (左) ・ S26 (右) 最下層  
完掘状況 南より



S25 南壁断面 北より



S26 南壁断面 北より



S68 (左) ・ S67 (右) 下層  
完掘状況 東より



S68 (左) ・ S67 (右) 最下層  
完掘状況 東より



建物跡  
S17・19・21・22・29・32～35  
検出及び掘り下げ状況 東より



建物跡  
S17・19・21・22・29・32～35  
検出及び掘り下げ状況 西より



S19 (柱穴)  
遺物出土状況 東より



S19 (柱穴)  
土層断面状況 東より



S32 (柱穴)  
上層断面 東より



S32 (柱穴) 下層  
3回目石出土状況 東より



S75 (井戸)  
掘り下げ状況 (S99掘削後)  
西より



S75 (井戸)  
井戸桶 二重構造 東より



S89 遺物出土状況 南より



造成した盛土の平面状況  
東より